

じぶんできめる応援団 第5回

センターでの経験は私の誇りであり、財産です



辻川勝利さん／NPO 法人知多地域権利擁護支援センターボランティア

今井友乃さん／NPO 法人知多地域権利擁護支援センター理事長

知多地域権利擁護センターには、団体の前身となる知多地域成年後見センター・地域福祉サポートちた時代から 20 年以上にわたって関わっていただいている方がいらっしゃいます。

辻川勝利さんは 60 歳を過ぎてからボランティアを始め、81 歳となった今も権利擁護センターはもちろん、プレーパークや学童保育など地域でさまざまな活動を続けていらっしゃいます。辻川さんと権利擁護センターの歩みをうかがいました。

「先回りしない」支援の大切さ

辻川：私は 1942 年、昭和 17 年生まれで今年 81 歳になります。島根県の山間の、今は出雲市になっている地域で夜間定時制高校を卒業するまで育ちました。

新聞で愛知県の製鉄会社が島根に工場を作る計画があるというニュースを見て、これなら将来は地元に戻ってこれるかもと思ってその会社に就職したのが、愛知に来たきっかけです。結局、計画は変更になって工場は建たなかったのですが（笑）、私はこちらで働き続けて、結婚をして、知多に家を建てて、2 人の子どもにも恵まれました。

もう少しで定年という時に、実家の母が倒れたという報せを受けました。それからは介護のために島根と愛知を行ったり来たりする生活に。さすがに大変で会社を辞めました。妻から介護のためにホームヘルパーの資格を取ったら、と勧められ、ヘルパー講座を受講しようと考えて地域福祉サポートちたを訪れたのが、最初に今井さんと会った時ですね。

今井：その時はホームヘルパー講座の開講が少し先だったんですね。その前に知的障害者のガイドヘルパーの講座があるから、先にそちらを受講してみませんかとおすすめしたんです。

辻川：勤めていた会社の同僚のお子さんに障害があると聞いていたこともあって、少し興味があったんですね。

その講座が終わって、次はいよいよホームヘルパーの講座だとなった時に、今井さんから電話をいただいて。知的障害のある人がホームヘルパーの講座を受講するから、講座を受講しながらその人のサポートをしてもらえないかと頼まれました。

今井：ガイドヘルパーの講座を通して辻川さんの人となりを知って、ぜひこの方をお願いしたい！と考えたんです。

—講座を受けたばかりでヘルパーの経験もない辻川さんに、障害のある人のサポートをお願いしようと考えられたのはなぜですか？

今井：本人よりも先回りをしないで、上手に関わってくれるところかな。

辻川：「本人より先回りしない」ことの大切さは、その後サポちたさんから紹介していただいた、脳性麻痺の S さんの支援をしたときに痛感しました。S さんは電動車椅子を使われている方で、一緒に電車に乗ったりとか、主に外出の支援をさせてもらいました。

当時は電動車椅子の方がひとり暮らしをしていることがとても珍しかったこともあり、マスコミから S さん取材したいと依頼されたことがあります。S さんのお父さんは快諾されましたが、それを知った S さんに「取材はいいけど、私に先に言うべきでしょう」と叱られました。

支援する側は良かれと思って、ついつい先に気をまわしがちになりますが、本人の同意なしに本人のことを決めてはいけない、支援をしてはいけないというのは、S さんにすごく教えてもらったことです。

今井：S さんは「お節介をされるくらいなら、ちょっとボーっとしたヘルパーさんの方がいい」なんて言っていたくらい。「トイレいいですか？ ご飯は？」っていちいち聞いてこないでほしい、私はトイレも食事もしたいときに自分から言うから、という考えの方だったんですね。

地域の人たちと関わりながら

今井：知多地域成年後見センターができた時から、辻川さんにパートタイムの職員になっていただきました。辻川さんはお金はいらない、ボランティアでとおっしゃったけれど、法人として私たちが必要だと考える支援を続けていくためには、きちんと予算をつけて、職員として取り組んでもらえる人を確保し続けていかなければと考えたんです。

辻川：当時は職員の人も少なく、事務所も小さな部屋でした。外から中が丸見えだから、カーテンレールを買ってきて付けました。(笑) その後、被後見人さんにお金を届けたり、ちょっとした支払いのお手伝いをしたり、グループホームに訪問したりといった仕事を始めました。

今井：今はセンターも大きくなって、後見制度のこともよく知られるようになって、私たちではできないことを業者さんをお願いすることも多いけど、当時はなかなか難しく、困ったらすぐ辻川さんに頼っていました。(笑)



辻川：庭の草を刈りに行ったりもしましたね。被後見人さんがお持ちの家が、病気や障害で家の手入れができなくなっていることは珍しくないですから。

草木が伸び放題だと近所の人も迷惑されているんですよ。役所に苦情を入れられたり。でも住んでいるのが障害者や認知症の方だと思えば関わりづらいうで、直接は何も言えないでいる。私が草刈りを始めると最初は遠巻きに見ているんだけど、半日くらいやっていると話しかけてくれたり、お茶を出してくれた。やっぱりその家のことを気にされているんですよ。

今井：知多半島の中でも比較的最近引っ越してきた人の多い、新しい住宅街だと住民のつながりが薄いというか、お互いを見る目が厳しいと感じることもありますね。家に障害者がいて大変そうだと分かっているなら、もう少し助け合ったり、あたたかく見守れたらいいのにも思います。

辻川：いわゆるゴミ屋敷と呼ばれるような状態の家の片付けもしました。私は片付けや掃除は嫌いじゃないんですが、それでもゴミや悪臭がひどくて逃げだしそうになった家もありましたね。でもその家には行政の職員さんや地区の区長さんも熱心に関わって、みんなで何

とかしようと頑張っていたから、これは後見センターとしても逃げるわけにはいかんぞって頑張りました。(笑)

今井: 私たちは成年後見がどうしても必要だと考えて始めたんだけど、専門家でもないし経験もなくて、やってみてから大変なことになったと気づいたんですね。でも、誰かに助けてもらわないと何もできない未熟な自分たちだったからこそ、仲間の輪が広がっていったのかもしれないです。

体験と知識の両方が必要

辻川: もちろん、活動していてうれしいこともたくさんありますよ。透析が必要な方で、入院生活をしている方がいらっしゃいました。他の入院患者さんは高齢で認知症の方が多かったのですが、彼はまだ若くて、生活に楽しみが感じられなかったんでしょうね。

そこで一緒に散歩しましょうと、秋だから落ち葉の上を歩いたらその感触をととても気に入られて。「故郷を思い出す」なんて言われてね。次は海釣りに行きたいと言われて、道具を借りて一緒に行きました。27匹も釣れて、大喜びでしたよ。(笑)

今井: 辻川さんはこの地域でほかにもいろんなボランティアをされているんですね。プレーパークとか。

辻川: 私がボランティアしているプレーパークに、センターで関わっている被後見人さんが遊びに来てくれるのも、うれしいですね。

今井: 私は辻川さんみたいな社会経験がある人が、いろんなところで障害のある人や高齢者の人に関わっている、そんな地域になったらいいと思っています。

施設とかじゃなくて、公園とか、フラッと遊びに行った先に知っている人がいて「〇〇くん、こんにちは、元気？」って声をかけてくれる人がいる。そういう人が増えれば障害のある人たちも安心だし、暴れたり泣いたりしている子どもがいても事情が分かってくれる人が増えれば親御さんたちも心配でことさらに押さえつけるようなことはしなくなるでしょ。

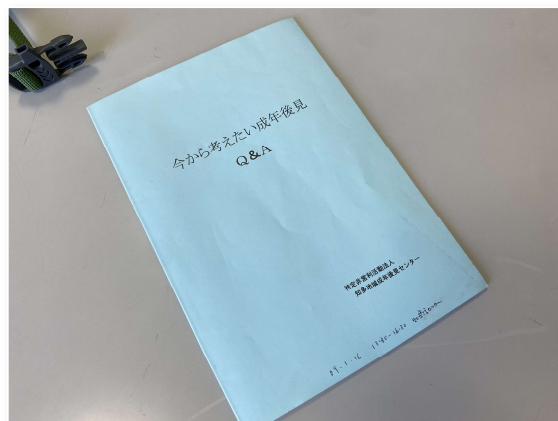
辻川: 学童保育でボランティアをした時も、センターでの経験が役立ちました。いま、子どもたちにとって環境整備が大事だとか、インクルーシブ教育と言われてますよね。センターで障害のある人、生きづらさのある人と過ごして学んだ経験があるから、だんだん理解できるようになってきた。

私が活動してきて感じているのは「体験と知識の両方が大事」ということです。体験だけでも、本を読んだりする知識だけでもだめ。私は母の介護のこともあったから、大府にある認知症研究・研修センターに回想法を勉強しに行ったりしました。探せばこの地域でも、知

識やスキルを得るための研修ってたくさんあるんですよ。活動や経験も大事だけど、学ぶ努力をしないと続かないし、楽しくないと思います。

そうそう、その中でね、一番勉強になったのが、この2009年の市民後見人養成講座でした。

今井：わあ！ありがたいですね。こうしてテキストまで持ち歩いていただいているなんて…



センターでの経験は大きな財産

—辻川さんが20年以上もこうした活動を続けることができたのは、何が原動力だったのでしょうか。

辻川：被後見人の皆さんが元気を取り戻される姿を見られたこともあるし、本当に出会った人に恵まれて、世の中は悪い人ばかりじゃないと思えるようになったということもありますね。自分が誰かと関わって、信頼してもらえたという実感もありますし。

思えば、私は幼い頃、家が貧しくて、修学旅行に行くお金がなかったんです。それを知った父親の勤め先の会社の方がカンパを集めて旅費を出してくれたんですね。近所の人も当時はズックって言ってましたけど、旅行用に新しいスニーカーをくれたりしてね。それですごく楽しい修学旅行の思い出ができたんです。そうして育てられてきたものですから、恩返ししたいという気持ちがあるのかもしれないですね。

センターで働かせてもらった経験は自分の誇りです。いろんな知識やスキルを得て、いろんな物事が理解しやすくなったという点では、大きな財産でもあります。

いま、SDGsとか、ジェンダー平等と言われてますよね。それらに対して、知識として知っているだけではなく、自分はどの行動できるかと考えられるようになったのは、センターでの経験があるからに他なりません。

女性活躍といえば、センターは20年前に比べるとずいぶん大きくなったけれど、最初から女性がリーダーシップを発揮していましたよね。加えて、職員やボランティア一人ひとりの特徴や得意を見出して、うまく組織づくりに生かしてきた。それがすごいと思いますよ。

今井：辻川さんは職員としてはいったん卒業ですけど、私たちはまだまだ色々なことに取り組んでいきたいし、これからもボランティアとしてお声がけさせていただきますので、お願いしますね。

辻川：これからはちょっとゆっくりしようと思っていたんですけどね。(笑)

私が元気なうちに、私ができることがあれば。でもそれって、今までとあまり変わらないかもしれないですね。(笑)

